Fasching, Fastnacht, Karneval

――ドイツ語圏における謝肉祭の名称――

林　　敬　太

1．はじめに

謝肉祭あるいはカーニバルは，カトリックの影響力がある多くの国々で開催される冬の祝祭である。また，謝肉祭やカーニバルと言えば，本来の意味を離れて祝祭全般や祝祭的なものを形容する言葉にもなっている。

ドイツ語圏でもカトリックの影響が強い地域では謝肉祭が開催されているが，地方によって呼び名が異なっている。一般的な辞書に載っている単語だけでもファッシング（Fasching），ファストナハト（Fastnacht），カーネヴァル（Karneval）と３種類もの言葉がある。しかし，これらは全く異なる単語ではなく，例えば，カーネヴァルを辞書で引けば，言い換え表現としてファッシングやファストナハトが載っている。ドイツ語圏の謝肉祭を研究する研究者もこれらを同列に並べることが頻繁にある。したがってこの３つの単語は同じ祝祭を地域ごとに別の名称で呼んでいる，と思っていいだろう。しかし，逆に，ファッシング，ファストナハト，カーネヴァルのどれかが他の２つの使用地域や，その他の方言を全てカバーすることはない。ある土地でファストナハトを開催している場合，それをカーネヴァルと呼ぶことは，基本的にはない。つまり，ファッシング，ファストナハト，カーネヴァルの３つの単語は，各地の謝肉祭をそれぞれ別個に指す名称になっているときもあり，その一方でドイツ語圏各地の地域差を超え，謝肉祭という祝祭全体の概念を指す名称でもある曖昧な単語なのである。このような現象がなぜ，どのように発生したのか。それは，謝肉祭という祝祭そのものに原因があると同時に，ドイツ語の持つ階層性とも関係がある。謝肉祭の名称についての問題は，ドイツ語における標準語（Hochsprache）と方言（Dialekt，Mundart）の関係や，それに加え両者の中間にある日常交際語（Umgangsprache）や地域語（Regionalsprache）といった，ドイツ語内の様々な変種に関わる問題でもある。

本稿では，これまでの語源研究の成果を概観するとともに，言語地図のデータを比較することによってこの問題を探っていく。

2．語源とその研究史

ドイツ語圏の謝肉祭研究において，現在の状況を作り出したエポックメイキングな研究と言え

るのはディーツ・リュディガー・モーザー（Dietz Rüdiger Moser）による著作『ファストナハト，ファッシング，カーネヴァル。» 逆さまの世界 « の祭り』（Fastnacht, Fasching, Karneval: Das Fest der » verkehrten Welt« ）である（Moser: 1986）。彼はその冒頭で謝肉祭の語源について言及しているが，ここでも謝肉祭という語が持つ特徴を挙げ，その問題点を指摘している。

モーザーによれば，謝肉祭はドイツ語圏で催される他の祝祭と比較すると多様な名称で呼ばれる祝祭だという。ここでモーザーは，名称の不統一は国際的な視野に立つと問題が生じる可能性があると述べている。

そして，モーザーがもうひとつ問題にしている点は，語源についての認知度である。彼によれば，謝肉祭の語源に関しては19世紀にほぼ決着がついているという。しかし，そうした研究成果が一般に広く知れ渡っていないことを問題視している。

モーザーはこの後すぐに語源の解説へと筆を進めるのだが，彼の問題提起には多少の補足が必要だろう。

まず，国際的な視点という問題だが，これは，ドイツ語圏外の人に向けて謝肉祭を紹介する際，統一された標準語が存在しないことによって混乱が生じる，という意味に他ならない。モーザーがこのように他者の視線を考慮する理由は２つ挙げられる。

ひとつは，第二次大戦後のドイツ民俗学には，過去の克服という最優先の課題があったことだ(1)。民俗学の分野では大戦終了まで多くの研究者がナチスに加担したため，その過去を克服し，学問として再生してゆくことが戦後の使命となった。その際，物的証拠を探し出すのではなく，想像力を駆使して仮説を作り上げる研究手法が問題視された(2)。また，ドイツ語圏内だけの視野に留まらないことも目標となったのである。

もうひとつの理由は，祭りの担い手に関わる理由だと思われる。謝肉祭は19世紀以降，第二次大戦による中断などの困難はあったものの，一部の地域では現在まで大いに振興され，観光を目的とした多くの人々が訪れるようになった(3)。

こうした潮流の中で，ドイツ語圏の各地で催されていた謝肉祭はそれぞれの特徴を比較されるようになった。そのため，謝肉祭という祝祭の多様性が浮き彫りにされ，祭りの担い手たちも自分たちの謝肉祭について意識するようになったのだ。

しかし，こうした祭りに対する意識は，別の問題を誘発することになった。ドイツ南西部シュヴァーベン地方出身の謝肉祭研究者であり，実際に同地の謝肉祭ファスネット（Fasnet）に参加しているヴェルナー・メツガー（Werner Mezger）は，祭りの担い手側にある問題を指摘する。謝肉祭が地域振興のコンテンツとして盛んに催されるようになった結果，祭りの担い手たちが郷土愛の発露として自らの謝肉祭を過剰に評価し，他の地域と衝突する傾向が見られるようになった。メツガーはこうした謝肉祭に対する過大評価の原因を，誤った知識による誤解だとしている(4)。モーザーが２つ目に問題にしていた，語源についての知名度の不足は，このことではな

いかと思われる。

ドイツ語圏の謝肉祭はゲルマンの古習俗に由来する，という説は現代でもよく見かけるが，謝肉祭の名称もこのゲルマンの古習俗と関連させてその由来が解説される。しかし，謝肉祭はゲルマンの古習俗である，という説こそは戦前に盛んに唱えられたもので，ナチスとの関連もある主張なのである。これらの言説は，第二次世界大戦の終結後，再建を目指すドイツ民俗学によって再び覆されたが，一般的にはいまだに根強くゲルマンの古習俗という意識が残っている。謝肉祭についての一般的なイメージがナチスと関係していることは，モーザーやメツガーらにとって，注目すべき問題なのである。

しかしながら，モーザーが「決着はついている」と断言しているように，現状では謝肉祭の語源については情報が揃い，進展があまり見られない。モーザー以降の研究においても語源についてはモーザーの引用やその補足がほとんどである。そしてそれは同時に，語源を明らかにするだけではモーザーやメツガーらの挙げている問題が解決しないことも意味している。

ともあれ，まずはモーザーの著作に従い（Moser 1986: S.11-16），代表的な名称であるカーネヴァル（Karneval），ファッシング（Fasching），ファストナハト（Fastnacht）の３種類について語源を確認することから始めようと思う。

カーネヴァルはラテン語が起源であり，ロマンス諸語でこれと同じ語源の単語が一般的に使用されている。例えばイタリア語ではカルネヴァーレ（carnevale），フランス語やスペイン語ではカルナヴァル（carnaval）と呼ばれている。ヴェネツィアやリオ・デ・ジャネイロなど有名な謝肉祭開催地もあるため，ドイツ語圏のカーネヴァルもそれらとセットで紹介されることもある。また，ミハイル・バフチン（Mikhail Bakthin）がいわゆるカーニバル論を提唱してからは，学術的な権威も付与された名称であるとも言える。

その語源は「肉」（caro）を「謝絶」，「抹消」するという説が，今日でも妥当だとされている（Moser 1986: S.11）。「肉を消し去る」ことが関係するのは，カトリックの制定している教会暦に基づいている。謝肉祭が実施されるのは，復活祭前に行われる断食期間のさらに前である。謝肉祭は，祭りの後の断食を指す言葉が変化して出来た名称だということになる。

中世の教会ラテン語に，「肉」（caro）と別の言葉を合成して，肉を遠ざけることを意味する表現があった。それらは carnislevamen，carnisprivium，carnetollendas といった表現で，これらの言葉を用いて断食の指導をしていた。それらが carnelevale と変化し，最終的に carneval となった，とされている(5)。

これらラテン語からきた表現は，ドイツ語文献では1699年から用例が見られる。このように，カーネヴァルはカトリックの聖職者が使用していたラテン語からドイツ語に持ち込まれ，民衆に広まったと考えられる(6)。

ファッシングは外来のカーネヴァルより時代を遡ることができ，1577年には用例が現れていた（Moser 1986: S.13）。このファッシングの語源もまた，カーネヴァルと同じく断食に関わるものだった。ただし，カーネヴァルやファストナハトと比較すると，断食との関係は間接的なものである。

中高ドイツ語に，ファッシングの前身となった vast-schanc という語がある。これは「断食」vast と「酒場」schanc をあわせた言葉で，断食が始まる前に町の酒場が行っていた在庫一掃セールを意味していたと言われる。断食期間が始まると街の酒場は商売が非常に困難になるため，断食前に在庫を一掃処分すべく大々的に売り尽くすセールを行った，とされている。この vast-schanc が Faschang へと変化し，さらに Fasching へと変化したと言われている。この vast-schanc とファッシングを結び付ける説は，後述するファストナハトの派生形ファスナハト（Fasnacht）を「樽祭」と解釈する説と相性が良い。どちらも酒場が関わったという共通点があるため，ファスナハトを「樽祭」と解釈する説を支える基盤にもなっている。

ファッシングの語源についてはこれで決定的かと思われたが，2007年になってヴェルナー・ケーニヒ（Werner König）が異論を唱えた。バイエルン地方での方言調査を基に，ファッシングとファスナハトが，共に「植物が実る」を意味する vas を語源とした単語ではないかと指摘し，語源について再び議論の必要が生じるようになった（König 2007: S.111）。

ファストナハトは実際の祭りを指す以外にも，ハンス・ザックス（Hans Sachs）などが残した「謝肉祭劇」がファスナハトシュピール（Fastnachtspiel）と呼ばれている。また，ファスナハト（Fasnacht），ファスネット（Fasnet），ファーゼナハト（Fasenacht）など，地域ごとの派生形が豊富なこともこの単語の特徴である。「夜」（nacht）の類語である「夕べ」（abend）とそのバリエーションである obend，obed なども仲間として含めると，「ファステルオーベント」（Fastelovend）など派生的な方言の多さは他の単語と比較して段違いに豊富である。

そして謝肉祭研究においては，このファストナハトこそが最も議論を呼ぶ名称である。

語の成り立ちは「断食」（Fasten）に「夜」（nacht）を連結させたものだが，「夜」（nacht）は「前夜」という意味も持つため(7)，ラテン語から音を輸入したカーネヴァルと比較すると，「断食期間の前夜」という意味を訳したものがファストナハトだと言える。ドイツ語で最初に現れた用例はヴォルフラム・フォン・エッシェンバッハの作品『パルチファル』に出てきた vasnaht だと言われる（Moser 1986: S.12）。

ところが，ここで t が入っているか入らないか，が問題となった。t がもともと入っていて後から抜け落ちた場合，t の入っていないファスナハト（Fasnacht）やファスネット（Fasnet）を，後から生まれた方言形として考えることができる。しかし，『パルチファル』の時点で既に t は

入っておらず，先にｔが入っていない語が作られ，後からｔが入り込んだのではないか，と考えることも可能である。

では，この違いは何を意味しているのか。これは，ファストナハト（Fastnacht）の fast が意味する「断食」が，初めから単語の成立に関わっていたのか，後から盛り込まれたのかの違いだと言える。つまり，教会暦にある断食の教えに基づいてファストナハトという語が生まれたのか，それとも断食とは別の意味を持った単語に，後から断食の意味が付け加えられたのか，という謝肉祭そのものの由来を探る上での大きなヒントになりうるからである。

モーザーによれば，ｔが後から付け加えられたという説は何度か登場したが，それぞれ反論されて退けられた。まず最初に，エッシェンバッハの『パルチファル』に現れた vasnaht について言及した説が登場した。この vas は現代ドイツ語の標準語でいうところの「暴れる」（faseln）のことではないか，というものである。しかし，この「暴れる」という語が現れるのは『パルチファル』よりも遅く，1685年に書かれた文献にはじめて登場するため，vas は「暴れる」（faseln）の意味ではない，と結論付けられた。

次に，「雄」を意味する fasel に nacht が連結して作られた，という説が登場した。この場合，fasel は「男根」を意味する visel，visellin が変化したものだとされた。しかし，この説も fasel-nacht という中間の形が文献に見られないとして退けられた，とモーザーはまとめている。これら退けられた２つの語源説には共通点がある。それは，謝肉祭の起源をキリスト教が浸透する以前だと想定して語源を考えていることである。「暴れる」（faseln）や「雄」（Fasel）が，いわゆるゲルマン的な古習俗の名残だというのである。荒々しく放埒な祭りや，収穫を祝う豊穣儀礼といったものが古代から行われ謝肉祭につながった，と考えられたのだ。こうした，物的証拠よりも想像力を重視する傾向が最も盛んになったのはナチス時代だった。19世紀末までにゲルマンの儀礼を由来とする説は否定されていたにもかかわらず，ナチスによって上記のような豊穣儀礼を由来とする説が盛んに喧伝された。ナチスとしては，キリスト教文化とはすなわちユダヤ人の文化であり，それがゲルマンの古習俗を後から変容させてしまったと捉えたのだ。ユダヤ人の影響を廃し，ゲルマンの文化を復興させる運動の一環として，ナチスは謝肉祭を奨励しつつ古習俗としてあるべき姿に統制してゆく。モーザーの報告では，1933年にナチス当局はケルンの謝肉祭運営委員会に対し，ファストナハト（Fastnacht）からｔを抜くように指導をしている。翌34年にミュンヘン枢機卿が「断食」（Fasten）起源説で反論を試みたが受け入れられなかった。35年３月３日にはナチ党機関紙『フェルキッシャー・ベオバハター』紙上で特集記事が組まれ，ｔを付け加えたのは過去の人間の愚行であった，という主張がなされた。同様に39年２月１日には『アレマネン』紙に，ファスナハトこそゲルマン最古の祭典だと主張する記事が掲載された（Moser 1986: S.14）。

このようなナチスによる主張は，民俗学の分野では戦後になって覆された。しかし，その成果

が浸透しているとは言い難いのが現状である。そして，先に挙げたケーニヒのように，これまでの語源研究とは異なった視点で議論をする者も現れるようになった。

ところで，ファストナハトを語源とした場合，tがどのように脱落したか，という問題が残る。それに対して，モーザーは音韻的な理由と意味的な理由を挙げている。

音韻的な面では，ファスト（Fast）とナハト（nacht）で１音節目のstと２音節目のnの音が同じように歯茎を調音部位とする閉鎖音のため，発声のリズムを整えるためにtが削られたとされている(8)。

意味的な面では，第二次大戦後に，「断食」（fasten）が「樽」（Fass）に変化したのではないか，という説が出された。樽とはワインやビールの樽のことで，古代ローマのバッカナリア祭の頃から，酒神バッカスを象徴するアトリビュートとして使われていた。謝肉祭はゲルマンの儀礼と言うより，このバッカナリア祭を起源とする見方もある。カーネヴァルという言葉の流入の影響もあり，特に近代になるにつれて謝肉祭には古代ローマのバッカナリア祭を意識した演出が多く見られた(9)。古代ローマの祝祭を意識しているうちに「断食」の意味が薄れ，代わって「樽祭り」と思われるようになったのではないか，というのである。これは，前述したファッシングの語源が酒場に由来する説と合わせると，ファッシングとファスナハトの両方が酒場に関係があることになり，有力な仮説だとモーザーは認めている（Moser 1986: S.16）。

こうしてモーザーはtが抜け落ちたものだ，と断定したが，その後，ヴェルナー・ケーニヒがファッシングと同様，ファストナハトについても異論を唱えた。こちらも，バイエルン地方で行った方言調査の結果を踏まえたものである。ケーニヒはtのない方言形のファスナハトが分布する地域が広いことから，各地でtが抜けるよりも，後からtを付け足す変化があったほうが自然である，と論じたのだ。そこから彼は，豊穣儀礼からファスナハトという単語が生まれ，ファストナハトに変化したのではないかという可能性を再び提示した（König 2007: S.111）。ケーニヒの主張を見る限りでは，彼はモーザーがまとめたこれまでの研究成果は十分に把握している。彼は方言調査の結果という新たな資料を使い，ファッシングと同様にファストナハトについても，決着したかに見えた語源論争にまだ議論の余地があることを示した。

これで謝肉祭の語源を一通り概観したことになる。そこで，これら語源研究の成果から言えることと，それらの残した課題をまとめることにする。

まず，これまで挙げた３つの名称，カーネヴァル，ファッシング，ファストナハトは，どれも数世紀は遡る由来を語源に持ち，それぞれが社会と密接に関わりながらドイツ語の中で生き残ってきたことが伺える。標準語が成立する過程で，各地の方言は整理され取捨選択されていったのだが，ファッシング，ファストナハト，カーネヴァルの３つは鼎立した状態で辞書に収録される状況になった。それは，それぞれの名称が持つ原義や歴史などのバックグラウンドが異なるため，

統一させることができなかったのだろう。では，３つの名称はどのように共存しているのか，それぞれの特徴から考えてみよう。

まず，カーネヴァルはラテン語に由来し，様々な言語に同じ語源の言葉を持つため，国際的なつながりを想起させる言葉である。外国からやってくる観光客の目を向けさせやすく，比較研究の際にも同一のカテゴリーだと認識されやすい。また，ドイツ語圏では，もともとドイツ語が存在しない外来語でさえ，できる限りドイツ語に翻訳しようと努力する傾向がある（新田，高田編 2013: S.224）。カーネヴァルがファストナハトやファッシングに置き換えられなかった理由は，他の名称にはない国際性を持っているからではないだろうか。

次にファッシングだが，この言葉は他の２つと比べるとキリスト教の断食を間接的に言い表している。つまり，最も宗教性が薄い名称だと言える。この宗教性の薄さはファッシングの特徴として注目すべきではないだろうか。次章で検討する言語地図上では，ファッシングは出現頻度が最も高い言葉である。謝肉祭はカトリックの勢力圏で行われることが多いが，カトリックや謝肉祭に比較的馴染みの薄いドイツ北部や旧東独地域にもファッシングという名称は広まっている。ファッシングという言葉がカトリックとの関係が薄いことは，こうした分布の理由の一つではないかと思われる。またファッシングの場合，この名称にこだわって謝肉祭を開催している地域がないことが，カーネヴァルやファストナハトと異なる点だろう。カーネヴァルはケルンをはじめとするラインラント地方，ファストナハトはシュヴァーベン地方とスイスで，地元住民が独自の形式で開催している。しかし，ファッシングはテレビなどのマスメディアの普及によって，もともとは祭のなかった地域にも広まった言葉だということが調査で判明している（Eichhoff 1977: S.43）。また，バフチンのカーニバル論や，「謝肉祭劇」（ファスナハトシュピール）のような権威的なものをファッシングは持っていない。いわば，ファッシングは広く浅く使用されている名称だと言える。

ファストナハトについては，確認できる最古の出典が『パルチファル』だという証拠の他に，謝肉祭劇という言葉があること，そして派生形が豊富なことから，最古の単語だと考えることができる。シュヴァーベン地方で謝肉祭の開催者たちが，自分たちの祭りをファストナハトと呼んでいるのも，古風な謝肉祭というイメージを大切にしているからではないかと思われる。逆に，ファストナハトには古臭く，方言的なイメージがつきまとうと言えるだろう。バイエルン地方での聞き取り調査には，「ファッシングの方が標準語に近い」というバイエルン方言話者の印象を記録されている（König 2007: S.111）。そして，この古臭さがナチスの民族主義に利用された原因の一つだと言うこともできる。カーネヴァルには外来のイメージが付いているのに対し，ファストナハトには土着のイメージが強いため，両者は併存しているのだろう。

さて，モーザーがまとめあげた通時的な語源研究をここまで概観してきたが，これだけでは判明しない問題が残っている。語源とそこから推測できる情報だけでは，ドイツ語圏の各地域で謝

肉祭がどのように呼ばれているか，実情を把握することは難しい。現に，ファッシングについては，語源だけではこの単語の特徴を説明しきれず，次章から使用する言語地図を先んじて眺めることになった。そもそも，謝肉祭の名称には複数のものが併存していると言っても地域によって名称が異なっている。語源研究の問題点は，こうした地域性が見えてこないことだ。謝肉祭はただ繰り返し行われてきた祝祭ではなく，近代以降，地域の担い手たちが主体的に作り上げてきた祝祭である。その際，謝肉祭を主催する人々は，どの名称を自分たちの謝肉祭の名前にするか，自分たちの意思で選んできた事例がある[10]。その理由は，語源を参照してのこともあるし，別の思惑があった例もある。地元住民が積極的に関わった結果，謝肉祭は彼らのアイデンティティとして存在している面がある。モーザーが示唆し，メツガーが報告した各地の謝肉祭主催者たちの間の衝突も，そうした意識の負の側面だと言えるだろう。語源研究の結果が一般に浸透していないことがこうした衝突の原因として挙げられたが，浸透していない原因をさらに考えるならば，特定の地域に応じた説明が難しいことではないだろうか。

そこで，これまでの通時的な概観に加えて，今度は名称の分布を共時的に見ることで，謝肉祭が各地でどのように呼ばれているか考察してみる。

3．言語地図に見られる特徴

3．1　ドイツ語圏における「日常交際語」（Umgangssprache）[11]の捉え方の変遷

さて，これから謝肉祭がドイツ語圏の各地でどの名称で呼ばれているか，具体的に言語地図を比較することになるのだが，言語地図の種類によっては結果に大きな差が生じることにまず注意しなければならない。これは，各言語地図の調査方法が異なるために生ずる現象である。そして，その原因に注目するとドイツ語の持つ階層性と向き合うことになる。辞書にファッシング，ファストナハト，カーネヴァルと謝肉祭を表す複数の名称が収録されている問題も，この階層性と関わってくるのである。

ドイツ語では，標準語が整備されてくる際に，方言に影響されつつも，方言とも標準語とも異なった言語レベルが存在している機会があることが意識されるようになった。それらは，「日常交際語」（Umgangssprache），「日常語」（Alltagsprache）あるいは「地域語」（Regionalsprache）と呼ばれて認知された。この中でも特に，「日常交際」（Umgang）という単語は多彩な意味を持っている単語である。例えば，同業者同士の交流や中産階級の社交の場での会話など，地域の私的な関係ではないが，公式とまでは言えない人間関係全般を表す言葉である。すなわち，ドイツ語が使用される場は，標準語が話される極めて公式な場と，方言が話される村落単位ごとの場以外に，社会集団や地域によって多種多様な状況がある。また，音声で伝えられる話し言葉と記述される書き言葉という区別も存在する。それら全てを包括するのが「日常交際」という語である（新田，高田編2013，S.225-245）。しかし，「日常交際語」という名称が考案された後，それらをさら

に細分化しようとする動きはしばらく現れてこなかった。標準語を扱う文法学と，各地の方言収集を旨とする方言学と異なり，標準語と方言の中間という簡単な３分割で，方言と標準語の間に位置するものとしてひとくくりにされてきたのである。しかし，近年になって日常交際語の細かい階層化が再び注目されるようになってきた。

現在ではこの日常交際語の領域を分析し，その姿を特定していくことが大きな課題となっている[12]。ドイツ語のこうした特性は，謝肉祭が様々な名称で言い表される理由のひとつだと考えることができるだろう。

まずは，日常交際語がどのように捉えられるべきか，構造モデルを使って確認する。

３．２　日常交際語の構造モデル

ドイツ語の成り立ちを様々な角度から解説し，かつ簡潔にまとめている書籍に『Dtv- ドイツ言語地図』（Dtv-Atlas zur deutschen Sprache）があり，第17版まで版を重ねている。初期の版と比べ，2011年に出版された改訂17版では日常交際語についての解説が大幅に差し替えられており，特に模式図については２種類が併用されている（図１，２）（König 2011: S.132,134）[13]。

図１では，方言と標準語の間にいくつもの楕円がある。これは，各地で，様々な社会的階層によっていくつもの日常交際語が存在していることを示している。　図２は方言と標準語がどこまで類似しているのか，そして，その中間の日常交際語がどの程度両者と近い関係なのかが示されている。例えば，図２の上部はドイツ北部だが，ここでは標準語と日常交際語の距離が近く，方言が離れている。これは，日常交際語が標準語化している状態だと言うことができる。また，逆に図の真ん中，ドイツ中部では３者の距離が近く，標準語がこの地方の方言を基にしたことが見て取れる。

さらに，各地の日常交際語に対して，方言と標準語の双方から矢印が発せられている。これは，日常交際語が標準語と方言の両方から影響を受けて成立していることを図示している。この図１と図２を併用することにより，ドイツ語における標準語－日常交際語－方言の関係をこれまでの版より精確に描写している。

３．３　言語地図の比較

謝肉祭の名称を調査した地図は複数存在するが，それぞれ調査方法や対象となる地域が異なるため，相互に比較していくことで，より具体的な実情を把握できる。本稿では，ドイツ語圏全体を調査した地図２枚，ドイツに限定された地図１枚，バイエルン州を対象にした地図２枚，そしてバイエルン州の南に隣接するオーストリア・アルプス地方の地図２枚の合計７枚の言語地図を分析の対象とする。本稿ではこの７枚を，原図から比較が可能な形に書き起こして使用する。

まず１枚目（図３）は，『ドイツ日常交際語単語地図』（Wortatlas der deutschen

Umgangssprachen〔WDU〕）に掲載されているものである（Eichhoff 1977: S.43）。これはアメリカの複数の大学が合同で調査を開始し，1977年に出版された。調査は質問項目を封書でドイツ語圏の各地に発送し，返送してもらった回答を集計するというものだった。調査対象となったのは20代から30代の男女で，親の代から現在の住所に在住している者とされた。

大まかに見ると，ラインラントなどのドイツ北西部でカーネヴァル，シュヴァーベン地方やスイスなど南西部でファストナハトとその派生形が使用されている，と言えるだろう。そして，その他の地域は基本的にファッシングを使用していることが見て取れる。謝肉祭のような娯楽的な祝祭そのものが制限されていただろう東独の場合でも，多くの地域が謝肉祭をファッシングと呼んでいることが明らかになった。ここで WDU は，ドイツ語圏各地にファストナハト系統の使用地域が点在していることに注目している。WDU によれば，もともとはファストナハト系の言葉が使用されていた地域に後からファッシングが到来し，ファストナハト系統にとって代わったのではないかと分析している。回答者の中には，ファッシングをラジオやテレビの放送で知った者もいたそうである（Eichhoff 1977: S.31）。このように，メディアの発達によって言語に変化が起こり，謝肉祭もその流れの中にある，と考えられるのである。

しかし，WDU の調査には一つ問題点がある。それは，書簡によるアンケートのため，有効回答を集めることに困難が伴うことである。特に調査当時の東独に関しては，国情のため回答率は２，３割程度であったそうである（Eichhoff 1977: S.17）。そのため，東独地域の地図については信憑性が低くなってしまっている。そこで，21世紀に入ってアウクスブルク大学で新たな言語地図プロジェクトがスタートした（図４）。

この言語地図は『ドイツ日常語地図』（Atlas zur deutschen Alltagssprache〔ADA〕）というプロジェクトによるものである[14]。プロジェクトは WDU の調査フォーマットを応用しているため，対象となる地域を設定した「基礎地図」は WDU の地図を援用している。調査方法はインターネットを用いた点が，WDU と大きく異なっている。アウクスブルク大学のサイト上に質問項目を掲載し，サイトの訪問者に回答を依頼する形になっている。回答者は自分の住む地域と年齢を入力して，サイト上にある質問に答える。

図４は図３と比較すると注目すべき点が２つある。ひとつは，旧東独地域に政治的な障壁がなくなったため，回答の信憑性が上がったことである。そして，図４の分布が図３のものと大きく異なる結果ではないため，WDU での結果は妥当なものだった，と ADA が証明したと言えるだろう。

もうひとつは，1970年代から2000年代にかけての変化である。ファッシングの勢力が伸張し，北部中央のカーネヴァル使用地域の一部がファッシング使用地域に塗り変わっていることが示された。これもまた，ファッシングがマスメディアで使用されて広まっているという，1970年代に WDU が行った分析を裏付けていると解釈できる。

しかし，ADA の調査による問題点は，回答者がどのような人物なのか特定が難しいことである。WDU の場合，年齢と来歴を初めから設定して書簡を送付したが，ADA はサイト訪問者に答えてもらうという受身の調査法のため，調査対象を絞りにくいと言える。それでも WDU に近い結果が得られたことは，WDU による調査に普遍性があった証拠とみなすこともできる。あるいは，2000年代にネットを利用して言語地図調査に協力する人物という調査対象が，WDU による設定とかけ離れていなかったと言えるかもしれない。

その一方で，2007年に公開された地図（図５）では WDU，ADA による調査と比較すると異なった結果を示しており，日常交際語の階層性を考える上で非常に興味深い。

2006年から2007年にかけて，インターネット上で謝肉祭を紹介するサイト『カーネヴァル市場』（Marktplatz Karneval）[15]がドイツの新聞『ディ・ツァイト』（Die Zeit）と協力し，ドイツ国内における謝肉祭単語の分布を調査した。図５がその結果である。読者は書面で自分の住む地域で使われている謝肉祭の名称を『ディ・ツァイト』に送付する方法が取られた。『ディ・ツァイト』紙は専門性が高い大部の週刊新聞であり，それを購読した上でアンケートに答えるほど意識のある読者層が調査対象ということになる。集められた回答はドイツの郵便番号によって区分され集計された。

まず注目すべきは，これまでの図３，４と異なる名称が回答に見出されることである。図３，４でカーネヴァル一色だったケルン周辺で，ファステルオーベント（Fastelovend），ファステルエーア（Fasteleer）という方言に近い形が回答されている[16]。また，ハンブルク周辺ではファスラム（Faslam）という呼び方がなされている。特にケルンに関しては，1823年以降，カーネヴァルの牙城としてドイツ語圏での謝肉祭興隆の魁となり（Euler-Schmidt / Leifeld 2007），現在でもカーネヴァルの中心地であり続けるだけに，異なる名称がいまだに使われ続けていることは特筆すべきだろう。

もう一つ注目すべきことは，図３，４での結果とは逆に，カーネヴァルが中央から東部にかけて勢力を伸ばしていることである。ドレスデン周辺などでカーネヴァルが使用されている例は図３，４には全く現れていない。全体的に見れば図５はファッシングの使用地域は決して広くなく，WDU が調査結果について「ファッシングが支配的な地域」（Eichhoff 1977: S.31）と分析した地域にも再検討の余地があることが示された。

そこで，ファッシングでほぼ統一されているように見えるバイエルン州に絞った言語地図に目を向けてみると，また違った結果が現れている。

バイエルン州ではバイエルン方言の研究が盛んに行われ，現在も州内の複数の大学で共同して行われているプロジェクト『バイエルン方言地図』（Bayerischer Sprachatlas）がある。このプロジェクト以前にも言語地図は複数存在しており，謝肉祭について調査した地図は，「方言研究委員会」（Kommision für Mundartenforschung）[17]が所蔵する第二次大戦以前のものがある（図

６）。これは1929年から39年までの10年間をかけて，2000にのぼる語彙の調査を行ったものである。書籍化はされず，調査方法なども不明のまま地図の下書きのみが現存している[18]。この地図では，州都ミュンヘンより東の地域でファッシングが使用され，さらにファッシングの派生形も確認できる。しかし，ミュンヘンを含むバイエルン州内の多くの地域は，ファスナハト（Fasnacht）とその派生形を使用していることが示されている。

この図６と同じ地域を1980年代から2000年代にかけて再調査したものが，上記の『バイエルン方言地図』である（図７）[19]。この調査はバイエルン州各地での音声収録が基盤となっている[20]。調査対象者は方言話者に限定され，平均年齢は75歳，ほとんどの対象者が農業を生業にしていた。

音声データを調査員が書き起こしたため，これまでの調査では見えてこなかった細かな派生形が図７では見られる。この図７で特徴的なことは，図６と比較すると若干ファッシング系統の勢力が伸びているものの，依然として方言ではファスナハト系統が多く使用されていることである。特に州都ミュンヘンは小島のようにファッシング地域となっている。この図７だけ見れば，ファスナハトが浸透してミュンヘンだけ取り残されたようにも考えられるが，図６と照らし合わせることで，ミュンヘンが周囲に先んじてファッシングを使用する地域になったと言える。調査員が調査対象者から聞き取った印象では，ファッシングは「標準語らしい」（hochsprachlich）語感を持つ語だとされている。ケーニヒは（König 2007, S.111）この印象について，19世紀にウィーンで行っていた上流階級のための謝肉祭がファッシングと呼ばれていたために，その影響を受けて高級感のある単語だというイメージが定着したのではないかと解釈している。

ここでもうひとつ，具体的にファッシングの伸張を確認している方言地図がある（図８，９）。こちらはバイエルン州の南に隣接する，オーストリアのチロル地方で行われた方言調査である[21]。調査時期，方法はバイエルン方言地図に近いものだが，この言語地図は独自の調査方法として，年代別に音声データを収集している。調査対象を60代から80代と，20代から40代の２つのグループに分け，それぞれ別個に聞き取りを行っている。その結果，図８と９からはファッシングの使用地域が西に伸びていることがわかる。図８ではファッシングとファスナハトの境界線が，タクセンバッハ（Taxenbach）とインスブルック（Innsbruck）の中間にある。これに対し，図９ではより西側までファッシングが浸透している上に，さらに西進する気配を見せている。また，地図の中央のインスブルック周辺では，ファッシングとファスナハトが混在している。

３．４　言語地図のまとめ

これらの結果を踏まえると，謝肉祭に関する単語の使用地域は様々な要因によって複雑な地層のようになっていると言えるだろう。『ドイツ方言学』（川崎2008, S.108）では，現在のドイツ語が持つ階層性に対して，地層に似た図式（図10）を提示して解説をしている。これに習い，ドイツ語圏の複数の地域でどのような名称で謝肉祭を呼んでいるか，図式化を試みたのが図11である。

図11は図10と同じく，階層の下の方を方言に近い名称にした。また，図10が地層のように見えることから，地層にある地滑りなどの動きを図に取り入れることによって，各名称の勢力が移り変わる様子を表現した。そのため，図11は長方形の積み重ねではなく，三角形の組み合わせとなり，勢力伸張を意味する矢印を図中に組み込んだ。ケルン周辺やハンブルク周辺のように，方言の上にカーネヴァルやファッシングが覆いかぶさっている地域もあれば，中央北部や東部のように，カーネヴァルとファッシングがせめぎ合っている地域もあると考えられる。よって，図の中央部ではカーネヴァルとファッシングの勢力がぶつかりつつ，その下に方言形が位置する構図になった。また，図３では方言が日常交際語に影響を与えていると矢印で説明されているが，逆に，バイエルン州やアルプスでの事例を見れば，日常交際語が方言に取って代わる事態が起きていると言える。そこで，バイエルンやアルプスではファッシングが横に広がりつつ下方向にも矢印を向けている構図になった。さらに，シュヴァーベン地方やスイスではファストナハトやファスナハトが方言から日常語まで一貫として用いられているため，図の下から上までを占める台形になった。

４．まとめと展望

謝肉祭は祝祭そのものがドイツ語圏で特異な存在として注目を集めることが多いのだが，名称を観察すると，ドイツ語の歴史と現状をよく反映し，標準語から日常交際語，方言に至る複雑な構造を体現している。今回は語源という通時的な変化と，言語地図という共時的な分布により，謝肉祭というドイツ語を時間と空間の２つの側面から分析した。

では，次の段階としてどのような問いを立てるべきだろうか。前章で見てきたように，謝肉祭を言い表す名称には，ドイツ語の階層性が関係している。その階層性は，ドイツ語を使用している人々の階層性とも関係している。その一方で，謝肉祭も祭に対して異なった関わり方をしている人たちが，一つの祭の中で階層を形成している（林 2013, S.77）。謝肉祭の名称が持つ階層性は謝肉祭そのものの階層性と関係がある可能性がある。それは同時に，謝肉祭を開催している共同体の階層性とも関係があるのではないだろうか。よって，謝肉祭がなぜこのような形になったかを追究し，名称のみならず祭りの歴史的経過や社会的構造をより具体的に明らかにする必要があるだろう。

注

（１） こうした民俗学の動向については，ヘルマン・バウジンガー（Hermann Bausinger）らが1960年代から取り組んでおり，ドイツで民俗学に携わる研究者の間で共有されている意識である（バウジンガー 2010）。

（２） バウジンガーは，民俗現象に対して実証的な調査結果よりも，想像上の概念のほうが社会的に重視されてきたことを挙げ，その現象に「後退」（Regression）という心理学用語を当てはめた。バウジンガーによれば，民俗学研究は20世紀になってから，積み重ねられた実証的な成果を無視して19世紀的な想念（Idee）に回帰

した。この想念への回帰によって社会に受け入れられる説得力を持つことができ，民俗学は学問分野として成立できるだけの勢力となった。そしてこの想念こそは，ナチズムが社会で勢力を拡大するために利用したものであった（前掲書 S.20-21, 211, 231）。他方，ドイツ語圏の外では，バウジンガーの言う「後退」に似た現象が，全く異なる事例研究によって報告された。『創られた伝統』（ホブズボウム 1992）では，想像上の概念に当てはまるように既存の文化を改編し，時には新しく作り出す行為が主題となった。これは事例研究から始まって社会一般に見られる現象として論じられた。さらに，『定本 想像の共同体：ナショナリズムの起源と流行』（アンダーソン 2007）では，文化事象の改編が，ナショナリズムの形成に行き着くことが論じられている。ドイツ語圏の民俗学はナチス時代からの脱却を目標とした際に，ホブズボウムやアンダーソンらに先んじてこれらの問題に取り組んでいた。

（3） 19世紀中盤以降，謝肉祭が観光イベントとして発展してきた経緯を，「シュヴァーベンの謝肉祭～通史から祭の構造を探る～」（林 2013）において，シュヴァーベン地方の都市フィリンゲン市を事例として報告した。

（4） メツガーは，シュヴァーベン地方の謝肉祭が戦後，かつてないほどのブームを巻き起こし，歴史的な事実が充分に知られないまま古代の祝祭として盛大に催されるという問題を指摘している（Mezger 1999）。

（5） スペインではカルナヴァル以外に，現在でも carnestolendas と呼ばれることがある。

（6） ちなみに，モーザーはヨーロッパ以外の地域での用例として，日本語を挙げている。彼によると，日本語では Shanikusai と呼ばれるが，Sha は「断る」の意味である，と解説している。カーネヴァルの解説としては唐突に挿入された感があるが，モーザーは日本語を取り上げた理由を，日本がカトリックの伝道地域であることとしている。モーザーが論じる謝肉祭論の骨子は，カトリックが祭りを主導することで，民衆に聖なるものと俗なるものを実体験させる狙いがあった，というものである。しかし，日本ではカトリックが少なくとも表向きには謝肉祭を奨励はしていないことを考えると，不十分な解説である。日本人からすれば，モーザーの解説によって判明したのは，訳語を作った人間がカーネヴァルの語源をよく理解して訳語を作ったことである。「謝」は感謝，謝罪，謝絶，と多義的な漢字のため，「肉に感謝する祭」とも解釈できてしまう。

（7） イエス生誕の前夜であるクリスマスを意味するドイツ語ヴァイナハト（Weihnacht）と同じ成り立ちである。

（8） これは，vast-schanc が Faschang になり，ファッシング（Fasching）になったときも同様だとされている。st が sch と同様の閉鎖音で，重複しているため抜け落ちた。

（9） シュヴァーベン地方の都市フィリンゲンでも，バッカス神が登場する祭が存在した事例が見られる（林 2013: S.82）。

（10） ケルンの住人は1823年にカーネヴァルを選んだことが判明している（Euler-Schmidt / Leifeld 2007: S.23-24）。また，メツガーの報告では，シュヴァーベン地方ではケルンにならってカーネヴァルを使用したものの，20世紀までにファスネットに変えたことがわかる（Mezger 2004: S.50）。

（11） 単に「日常語」と訳すのが一般的である。本稿では Alltagssprache という呼び方も同時に使用すること，また，Umgangssprache が含む多様性を重視する意味で，高田博行が『講座ドイツ言語学　第２巻　ドイツ語の歴史論』の第９章で用いた「日常交際語」という訳語を採用した（新田，高田編2013）。

（12） たとえば，マールブルク大学では言語地図を用いた人文学初の大掛かりなプロジェクト Rede（Regionalsprache Deutschland）が行われている。このプロジェクトは，ドイツ語の言語地図を体系的に作成し，言語地図の基本となったゲオルク・ヴェンカー（Georg Wenker）が遺した言語地図をデジタルアーカイブ化して誰でもインターネット上で閲覧出来るようにしたヴェンカー・アトラス（DiWA）が基になっている。このアーカイブはヴェンカーの地図をデジタル化するだけに留まらず，後続の言語地図も収集していた。さらに規模を拡大し，最終的にドイツ語圏内のあらゆる言語地図を収集して比較検討を可能にするシステムを構築するのが Rede の目的である。しかしながら，謝肉祭についての言語地図は未だに収集しきれておらず，今回は主に Rede に収集されていない地図を使用することになった（川崎 2008: S.109）。

（13） なお，図１は初期の版では非常にシンプルだった。初版から17版までの間に，日常交際語に対する認識が大きく変わったことがわかる。

(14) アウクスブルク大学の哲学歴史学部ゲルマニスティック学科ドイツ言語学ゼミナールが2001年から開始した調査で，１年を１期とし，年度ごとに結果を集計して地図化するというものである。このプロジェクトは拠点をザルツブルク大学に移して現在も継続中で，2013年には10期目の調査を行っている。謝肉祭については2004年から2005年にかけて実施された２期目の調査の中で質問が設定された。基本的にインターネット上のみで公開されているが，本稿での使用には難しいカラー図版であるため，本稿のために WDU に近い形に書き直した。http://www.atlas-alltagssprache.de/runde-2/f03/　2013年８月16日現在

(15) http://www.marktplatzkarneval.de/karneval/naerrischelandkarte　2013年８月16日現在

(16) 謝肉祭が近代化する以前の時代に，謝肉祭について記した日記では，fastovent という形が現れている。（Herborn 2009: S.12）また，Fastelovend という形がケルン方言に存在する（川崎 2008: S.176）。

(17) この組織は専らバイエルン地方の方言を研究し，方言辞書を編纂している。http://www.bwb.badw.de/ 2013年８月16日現在

(18) この地図は下書きのみで掲載には不向きのため，他の図と同様に本稿のために書き起した。http://www.bwb.badw.de/　2013年８月16日現在

(19) これは『ドイツ言語地図』の編集責任者でもあるヴェルナー・ケーニヒが主導したもので，1984年にアウクスブルク大学で調査が始まった。その後，アウクスブルク大学で作られた調査フォーマットを他大学が使用するかたちで共同プロジェクトが発足し，州政府の援助により調査が続けられた。バイエルン州内の各地域をそれぞれ１つの大学が担当して調査が進められ，各調査ごとに完結した内容として見ることもできる。調査結果は大学ごとに分冊として順次刊行が進められ，大学ごとに異なったスピードで刊行が続けられている。2006年にはそれをまとめる形で『バイエルン方言小地図』（„Kleiner Bayerischer Sprachatlas"）が刊行され，州立図書館のサイト上で，『バイエルン方言小地図』の内容を音声データと同時に閲覧できるようにするプロジェクトが始動した。http://sprachatlas.bayerische-landesbibliothek-online.de/　2013年８月16日現在

なお，この地図は（König 2007: S.110）に掲載されたもの。

(20) 調査員は訓練を受けた後，調査対象者のもとに５日間滞在する。調査員は滞在しているあいだに，2000を超える音声データを収集し，音声データを言語学の様々な分野に応じて分析する。それらは音韻論，統語論，形態論，語彙論など分野ごとにまとめられ刊行された。

(21) http://www.argealp.org/atlas/data/ergebnisse_wortschatz.html　2013年８月16日

参考文献一覧

アンダーソン，B／白石隆他訳：『定本 想像の共同体：ナショナリズムの起源と流行』書籍工房早山，2007

川崎　靖著：『ドイツ方言学―言葉の日常に迫る―』現代書館，2008

新田春夫，高田博行編：『講座ドイツ言語学　第２巻　ドイツ語の歴史論』ひつじ書房，2013バウジンガー，ヘルマン／河野 真訳：『フォルクスクンデ　ドイツ民俗学　上古学の克服から文化分析の方法へ』文緝堂，2010

林敬太：「シュヴァーベンの謝肉祭～通史から祭の構造を探る～」，『Waseda Blätter 20』，2013

ホブズボウム，E／レンジャー，T／前川啓二他訳：『創られた伝統』紀伊國屋書店，1992

Eichhoff, Jürgen: „Wortatlas der deutschen Umgangssprachen" Francke, Bern, 1977

Euler-Schmidt, Michael / Leifeld, Marcus / Festkomitee des Kölner Karnevals von 1823 e.V. (Hrsg.): Der Kölner Rosenmontagszug 1823-1945, J. P. Bachem Verlag, Köln: 2007

Herborn, Wolfgang: „Kölner Fastnacht, von Anfängen bis 1600" Georg Olms Verlag, Hidelsheim, 2009

König, Werner; Renn, Manfred: „Kleiner Bayerischer Sprachatlas" Deutscher Taschenbuch Verlag, München, 2007

König, Werner: „Dtv-Atlas zur deutschen Sprache: Tafeln u. Texte" Deutscher Taschenbuch Verlag, München, 2011

Mezger, Werner: »Rückwärts in die Zukunft« Metamorphosen der schwäbisch-alemannischen Fastnacht. In:

Fastnacht-Karneval im europäischen Vergleich. Hrsg. von Matheus Michael, F. Steiner, Stuttgart: 1999

Mezger, Werner: „Das Große Buch der Rottweiler Fastnacht“ doldverlag, Vöhrlenbach: 2004

Moser, Dietz Rüdiger: „Fastnacht, Fasching, Karneval: Das Fest der » verkehrten Welt« “ Edition Kaleidoskop, Graz, Wien, Köln: 1986

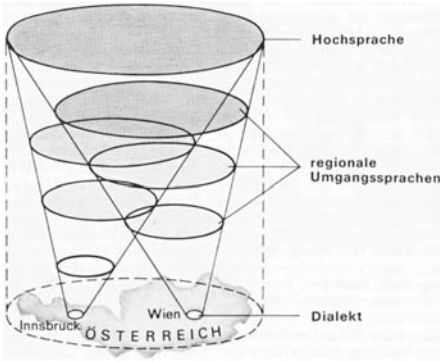

図１．

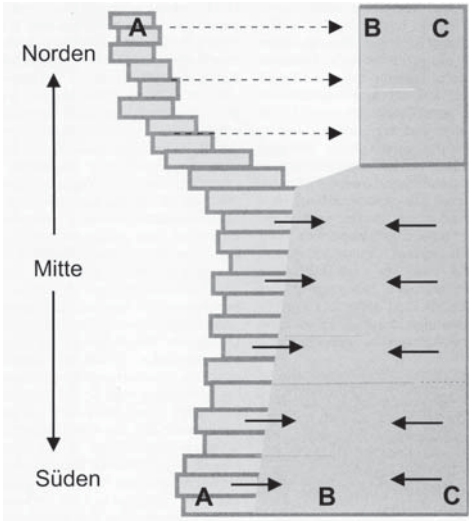

図２．

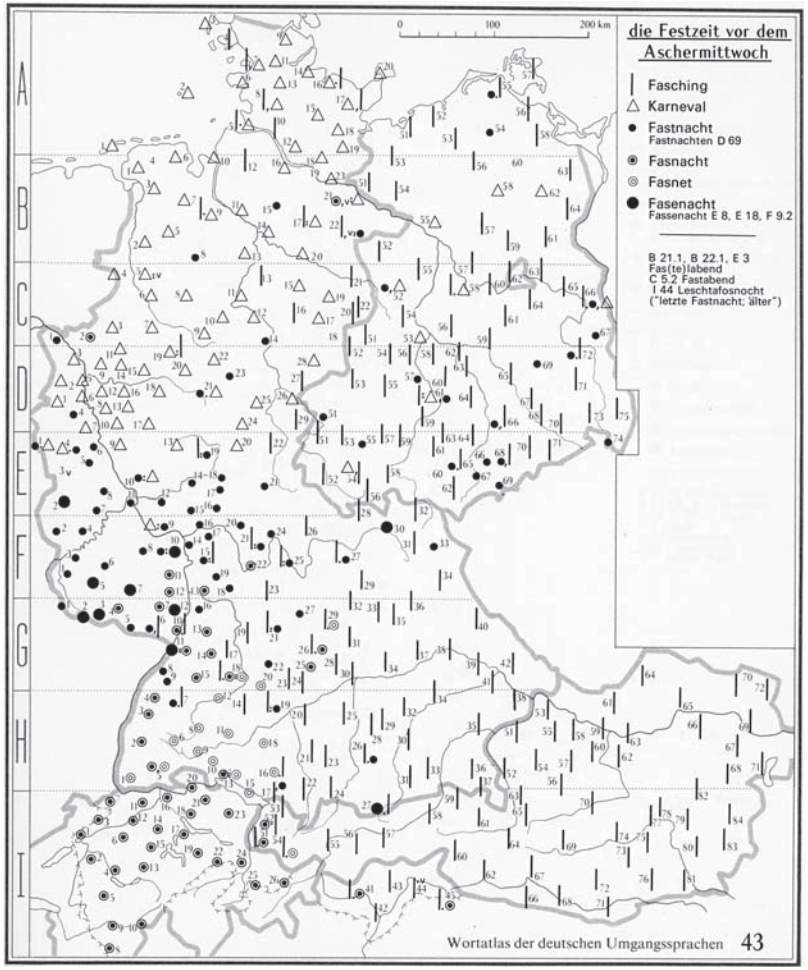

図３．『ドイツ日常交際語地図』での分布図

図１．図２．『ドイツ言語地図』第17版で提示された標準語－日常語－方言の構造モデル。

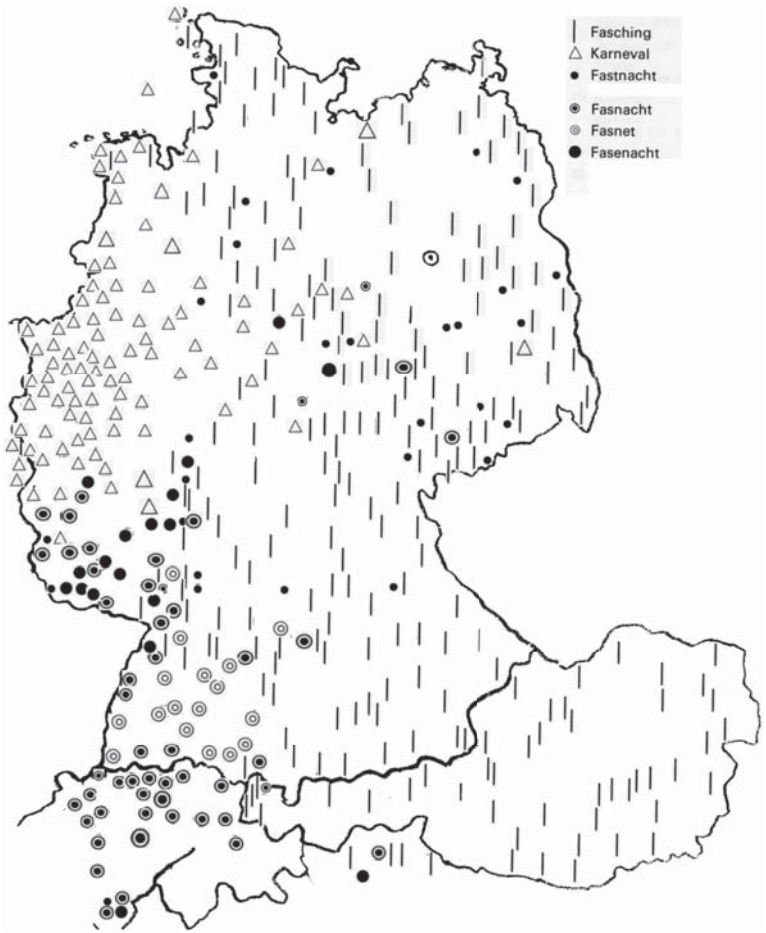

図４．『ドイツ日常語地図』の分布図を書き起こしたもの。

図５．Marktplatz Karneval と die Zeit 紙による調査を書き起したもの。

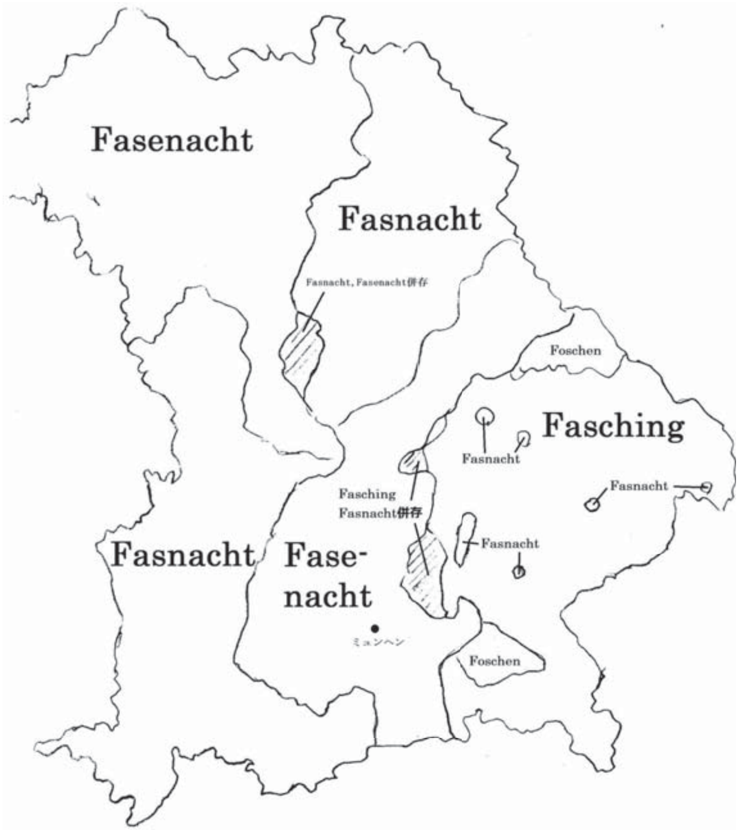

図6．

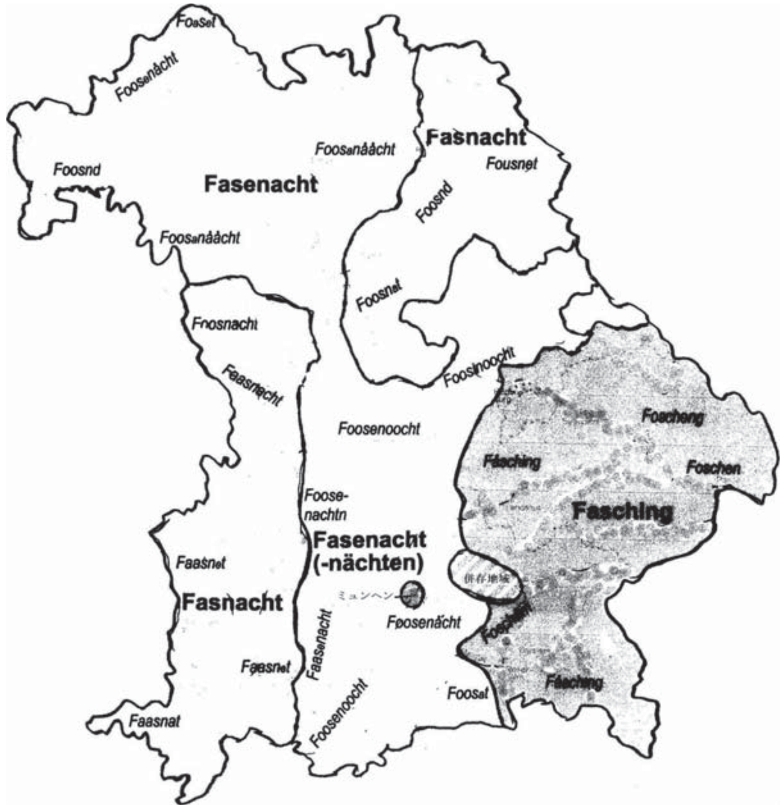

図7．

図6．「方言研究委員会」所蔵のバイエルン州方言地図を書き起したもの
図7．『バイエルン方言小地図』によるバイエルン地方の分布図に補足情報を加えたもの

図８．チロル地方で行われた60～80代への調査を書き起したもの

図９．同じく，20～40代への調査を書き起したもの

図10.『ドイツ方言学』で提示されたドイツ語の階層モデルを書き起したもの

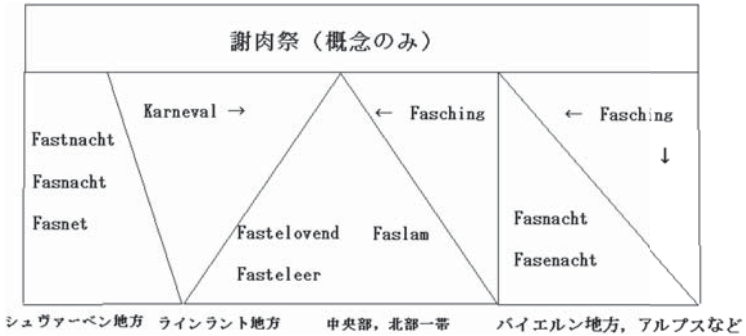

図11. 謝肉祭分布の階層モデル